

巻頭言「先生、言葉を意識していますか？」

教育研究所連絡協議会委員長 栢本 尚之

年齢を重ねていくごとに、言葉の一音一音を今まで以上に考えて使っている自分に、最近ようやく気付きました。それ故に、話すことが怖くなることもあります。この職ではあってはならないことです。言葉の選択を考えずに話をしていると、言葉の使い方がどんどん荒れていくような気もしています。まさに、“口は禍のもと”かも知れません。

普段の会話の中では『たぶん言い間違いだろうな』と聞き手が勝手に判断することで、会話が途切れずに成り立っていることはありませんか。聞き手は、判断できる許容範囲内であれば自分の中で消化して受け流しています。

しかし、これを子供たちに期待してはいけません。“先生”は、言葉を正しく使う人でありたいものです。主語を伴わない話し出し、意味が変わってしまう言い間違い、「右」を「左」と言ってしまうような大間違いの発言等、意識しない不正確な言葉の発信は、子供たちを混乱させ、困らせ、悩ませ、そして考え込ませます。先生への信頼感の低下や不祥事につながる危険性を心配するのは、大げさなことでしょうか。

また、現代は、ら抜き表現が横行しています。「食べれない」「投げれない」などは、おかしい言葉の使い方です。これをパソコン入力すると、仮名漢字変換ソフトによって誤入力と指摘され修正されます。しかし、残念ながら人間には、瞬時に正しく修正・変換して自動で正しい発声をするといったAI機能はありません。

“先生”が、このような間違った言葉を使うのはいかながなものでしょうか。「忙しいから、そんなことを気にしてられない」でよいのでしょうか。そのような言い訳にすげらずに、自分の言葉を意識してみてください。

研究所便り「令和3年度自然観察会 ～動画配信を開始～」

教育研究所研修相談員 長澤 貴

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症予防への対応として、参加者募集による観察会は開催することができませんでした。そこで、講師の方々が、観察・調査を実施し、活動の様子を動画にまとめてくださいました。

本日（令和4年3月1日）付けで、「おだわらっ子チャンネル」で配信を開始いたしましたので、児童生徒に紹介していただくとともに、授業などでも活用してみてください。

（小田原市教育研究所のホームページからも見るができます。）



磯の観察



夏の虫の観察



酒匂川水系の野鳥



小田原の地形



ツバメの観察

児童生徒が主体的に取り組む特別活動に関する研究
～望ましい学級集団づくりを通して～

近藤基子(報徳小) 高橋ひろみ(白鷗中)
高橋修司(山王小) 石井慎子(城北中)
瀬戸根優記(橘中)

児童生徒が主体的に学校行事や学級活動に取り組むには、どのような指導が有効なのかを研究し、そのポイントを明らかにするために、昨年度より取り組んできました。今年度は、1年目に研究した内容をもとに、各研究員の先生方が実践を行い、成果と課題をまとめてきました。

5年オリンピック2021 <報徳小学校 近藤基子総括教諭>

「クラスでも運動を取り入れた集会をしたい」「コロナでクラス遊びがなかなかできなかったから遊びたい」といった子供たちの声から、学年を対象を広げて生まれたイベントです。企画から運営まで、何度も話し合いを重ねていきました。一人ひとりに役割があることから、係ごとの相談も活発になり、主体的な姿が見られました。最後には、隣のクラスから企画運営に対するお礼のメッセージが届き、自己有用感を感じることに繋がりました。

年度初めの話し合いで「男女関係なく関わりを持ち、仲の良いクラスにしよう」というクラス目標になりました。その目標の実現に向け、開かれた「学級レク」。開催した後の振り返りから→さらに工夫と改善を加え→再度実施と、PDCAサイクルを回すことで、活動後の達成感を生みました。また、PDCAを回すごとに、実行委員に立候補する生徒が増え、主体性を育むと共に、お互いを尊重して活動に取り組む様子が見られました。

学級レクを通して
<白鷗中学校 高橋ひろみ教諭> **友達の輪を広げよう**

今回の研究の成果についてリーフレットにまとめ、各校にお知らせしていく予定です。

ある教室から「受け継がれる学びの姿」

教育指導課指導主事 剣持 公保

黒板の上には、大きなディスプレイが設置されている。見慣れていたはずの教室だったが、それだけで随分と違う教室のように感じられる。以前と同じように、整然と座席が並んでいるが、校内のインターネット設備は既に整っており、一昨年度まで私自身が勤務していたこの学校では、すべての教室がネットワークを通して結ばれている。学校という空間の活用方法が大きく変革している。授業も、集会も、できることはさらに広がっていくであろう。この日、生徒たちは、各教室の自分の席にて、終業式を迎えていた。それぞれが教室の大きな画面を通し、校長先生の話をよく聴いていた。ドラえもんの世界になぞらえた「自分の役割」という内容であり、生徒は各々自分自身を顧みていたようであった。

やがて、3学年委員長が、凜とした声で語り始める。「3年生として運動会を引っ張り、できることを精一杯やれたこと。それが自信と誇りになった。」「そうやって協力して何かを成し遂げた仲間と、修学旅行に行かれなかったことは大変残念であったが、それでもこの困難を一緒に乗り越え、それぞれの進路に向かって頑張っていきたい。」かつての教え子が、力強い言葉を述べていた。そういえばあの頃、「修学旅行で見てみようよ」「鎌倉で見たこれは京都の…」等、生徒と話していたことを思い出して、少し切なくなったものだが、この教室では、画面越しに伝わってくる学年委員長の言葉を、誰もが静かに受け止めていた。自分の役割を意識し、精一杯全力で毎日を過ごしてきた生徒たちの努力と絆が響き渡っていく、光ある言葉であった。

コロナ禍により、社会生活は大きく変革せざるを得なくなった。人々が社会として存続していくために、必要で必然な変革である。その変革のさ中である現在、一つの場所に集まることすら困難な状況であるが、学びを止めない、という覚悟と努力により、この日、この教室では、先生方や生徒の思いが結びついていた。形を変えながら、学びは確かに継承されている。

この教室、この学校から、「こうしていこう」という意思がそのまま未来になっていく、心強い力が感じられた。意思あるところに、道は拓けるのだ。